

## Special Essay

### ブレインバンク

病理学（二）  
杉田 保雄

ブレインバンク（死後脳バンク）は難治性神経疾患の治療、予防のためには患者の脳を直接調べることが必要であるという発想から生まれてきました。すなわち、患者、医療関係者、研究者が協力して死後脳を体系的に収集し、運営、管理するシステムです。もちろん、脳を提供した本人には還元されませんが、次世代の患者さんにはより改善された治療という形で還元されるというボランティアの精神が根底にあります。ブレインバンクは1960年代より国家的プロジェクトとして欧米各国で整備されてきています。本邦では欧米型の本格的なブレインバンクは存在しませんが、福島医科大学精神科、東京都老人総合研究所、愛知医科大学加齢研究所などでNPO法人あるいは施設蓄積の形でブレインバンクへの取り組みが既に始まっています。本年度の第48回日本神経病理学会のシンポジウムのテーマの一つとしてブレインバンクが取り上げられ、本邦においてもブレインバンク設立の気運が高まってきました。これは臨床研究、動物実験、培養研究でいくら結果を出しても進化の頂点に立つヒトの脳での最終的な確認無しでは難治性神経疾患（神経変性疾患、代謝性疾患、脳腫瘍など）、統合失調症、高次機能障害などの本質的な病態の解明、治療に結びつかないということが背景にあるからです。また個々の施設のみではブレインバンクの運営、管理が困難であるという点も挙げられます。したがって個人情報、財源などの諸問題はありますが、近い将来に我が国でも必ず本格的なブレインバンクが実現化されると思います。

さて本学の実情はいかがでしょうか。剖検体数、神経病理医、施設などの人体病理を主体とする神経病理学の基盤が全くといっていいほど整備されておらず、とてもこの様なプロジェクトに参画できる状態ではありません。しかし、他大学と異なり本学では過去に脳疾患研究所教授 安楽 茂己先生という素晴らしい神経病理学者が活躍され、第6回の日本神経病理学会がこの久留米の地で開催されたという実績もあります。21世紀は脳研究の世紀とも言われます。今後の本学の発展あるいは学生、医師の教育のためにも神経病理学の基盤整備は必要不可欠と考えます。本学の指導的立場の諸先生方には是非ともこの様な我が国のニューロサイエンスの動向及び本学の実情を認識していただきたいと思います。更に手遅れにならないうちに本学における早急な神経病理学の基盤整備を希望します。

